



6月11日(日)に伊那弥生ヶ丘高校東京支部同窓会に招かれ出席してきました。そこでの出会いと同窓生の思いから教えられたことをお伝えします。

東 京支部同窓会は、コロナ感染症のため4年ぶりの開催となり、私は初めての出席となりました。講演会も計画されており、その講師で本校や伊那北高校の歴史を研究されている山口通之先生が同じテーブルにいらっしゃいました。そして、伊那高等女学校第33回卒の岸本多恵子さん(94歳)がお元気でご参加されており、やはり同じテーブルでした。そのテーブルでの話題は、昭和19年8月の愛知県の三菱重工名古屋航空機製作所への学徒動員と同級生の死の話でした。山口先生の講演で触れられたことによるものでした。

こ の学徒動員において、当時16歳であった故飯島米子さんが米軍の爆撃で亡くなったことにより、その他の269名の動員された女学生は伊那に帰ることができた(当時の淀川茂重校長の決断で)という第二次世界大戦中の悲しい体験を岸本さんがお話しくださった。

飯島米子さんの慰霊碑が本校正門から入って、同窓会館入口前にあります(写真・上・中)。慰霊碑の正面には、「鎮魂 ふるさとに 帰り来ませと石に彫り 生き残りたる者は 悲しむ」とあります。女学生時代の大部分を戦争にかり出され、最終学年になってから学業を完全に中断して通年の学徒動員をしなければならなかった境遇。そして、卒業直前の昭和20年3月、学友であった飯島米子さんを空襲で失った悲しみが忘れられず、平成17年3月に同じ仲間で慰霊碑を建立しました。

慰霊碑の裏側には、思いがつつづられています。『太平洋戦争末期の昭和19年8月1日、飯島米子さんを含む県立伊那高等女学校4年生、270名は、「閣議決定に基づく学徒動員実施要項」により、軍需工場への出勤命令を受け、三菱重工業(株)名古屋航空機製作所へ動員された。12月には東南海大地震に見舞われ、相次ぐ余震と、その頃より激しくなった米軍の空爆により、常に死と向かい合う日々であった。折しも、昭和20年3月13日、米軍機の空爆は作業中であった生徒のうち、16歳の飯島さんの命を奪ってしまったのである。飯島さんの死を契機に、私たちは故郷へ帰ることができた。生き残った私たちは、この事実を決して忘れることはない。戦争によって生徒が、学問する権利を奪われ、死んでいった悲しみを再び繰り返すことの無いよう後世に伝えたい。この度、没後60周年忌を前に、同学年生一同相計ってここに慰霊の碑を建立することにした。』(写真・中)

また、学徒動員の記録を綴った「いのちありて」第1集、第2集(写真・下)は、本校図書館にあります。

私は平和を希求する強い願いを持って、岸本さんの悲しみやこの碑に込められた深い思いを在校生に伝えていきたいと思いました。

